

春岡村の伝説

・春岡村に伝わる物語七・

春野図書館の裏、丸ヶ崎新田と綾瀬川の向こう側の蓮田の辻谷だけに伝わる恐ろしくも悲しい伝説です。

●有無と膳棚（寅子伝説）

丸ヶ崎に有無（あんなし）という字（あざ）がある。また、深作には膳棚（ぜんだな）という名の橋がある。この有無、膳棚についてはこんな話が伝わっている。

河合村大字馬込（現岩槻市）の小字辻谷に虎子（寅子）とって稀に見る絶世の美女がいた。父は三浦義直、祖父は三浦義康、曾祖父は三浦朋義で京都の名門藤原氏の一族である。承久の乱（一二二一年）の時、義直は京都をのがれて、ひそかに東国へ来たのだったが京都に妻と女兒を遺して行方知れずになってしまった。

妻は五歳の女の子を連れ、夫の行方を尋ねながら奥州へ落ちのびようと、武蔵国へたどり着いた。

京都を出てから早一年、原市街道から岩槻へと向かったが、ちょうど辻谷にさしかかった時、母は急な病におかされ道端の農家（本橋某）に入って休ませてもらったが、三日目に母は帰らぬ人となってしまった。

農家は老夫婦だけだったので、女の子を神様からの授かりものとして、名を虎子と呼んで可愛く育てた。虎子はもとより由緒ある家の血をひいているので、生まれながら利口もので、その上言葉づかいも上品、顔形もお雛様のように可愛らしく、孝行の心も殊の外厚かったので、老夫婦はこの上もない仕合せと大いに喜び、いつくしんで育てた。

虎子は十六歳の春を迎え、美しさはますます増し、近所近辺の若人の評判となった。若人達は仕事を捨てて夜となく昼となく虎子のところへ遊びに来るようになった。そうなるとお互いに競争心が出て、友人も兄弟も不和となって、はては喧嘩となり血の雨を降らすこともしばしばであった。老夫婦の今までの仕合せはいつしか心配の種となって、日夜苦しむようになった。虎子は父の心境を察し

「私のことで村の禍を招くことや、父母に心配をかけることはこの上もない親不孝でございませう。どうか私をないものとあきらめていただいでございませう。」と覚悟のほどを示した。

明けて延慶四年三月八日、老父は眠れぬ眼を血に染めて夜明けとともに床をはなれたが、虎子がなかなか起きてこない。不思議に思っ虎子の部屋の障子をあけて呼び起こしたが、返事もなく、掛布団をめぐつてみると、虎子は自害していた。

かくて老夫婦は村の若人達に「今日は、すでに亡くなった娘の周忌に当たっておりますので、心ばかりの法事をいたしたいと思ひます。」と告げて歩いた。（つづく）

平山由喜



膳棚橋
見沼区春岡
2丁目32-1
(見沼代用水)

出典・・・出典・銭場佐一郎『思い出の春岡』（図書館蔵）